西洋と日本の薬局、処方箋の正しい調剤の始まり

中室嘉祐

長い錬金術時代、とくにヨーロッパでは実験用ガラス器具が発達して強酸・強アルカリも使用され、秘願の不老不死の妙薬や黄金の合成には至らなかったが、化学薬学は格段の進歩発展をなし、医薬兼業の医業から薬業、薬学が分離独立した。

神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世は一二四〇年憲法を発令し、医師の薬局所有を禁止して、世界最初の医薬分業を両シチリア王国において実施した。医薬分業は、医師の反対もなく他の西欧諸国につぎつぎと行われていった。新大陸に移住した人達のうち、アメリカ医学の父と称せられるモーガン Morgan は、英国に留学して医学を修めアメリカに帰り、一七六五年フィラデルフィアにアメリカ最初の医学校を開校し、「今後アメリカにおいては医師は処方箋を発行して医薬分業を行う」ことを提言した（アメリカにおいてこそ医師自ら調剤して正しい投薬をしようとの反論はなかった）すなわち、アメリカへ移住した人々の西欧の母国では医薬分業が正確に行われていたとみるべきである。その後一七七六年、米国は一三州をもって独立し、全米五〇州は法律によらず完全な医薬分業が行われた。

日本では奈良時代、中国大国より文化・技術が伝来し、漢方医学、本草学も渡来した。医師が自ら診断・処方・調剤・投薬する医薬兼業の漢方医学が徳川末期まで続いた。

鎖国になると和蘭商館医を通じ西洋医学が伝わり、とくにポンペ Pompe は幕府の海軍伝習教官をも兼ねていたので、日本各地の大名などから派遣された医学生が多数彼の許へ集まり医学の教えを受けた。ポンペは、医学教育は講義や屍体解剖では不可で、病人について実際の医学を教えねばならないと強く幕府に申請して、文久元年日本最初の洋式病院養生所が開院した。ポンペは、西洋医学のほか薬室にて医学生に処方箋調剤をも教えた。医学生は日本各地へ戻り、医師が処方箋調剤を行う医薬兼業の医学（私は「長崎式西洋医学」と称したい）を日本中に拡めた。

明治七年八月、政府は長与専斎らが欧米を視察した結果の医制（第四一条、医師ハ自ラ薬ヲヒサグ（売ル）コトヲ禁ス、医師ハ処方書ヲ病家ニ附子シ相当ノ診察料ヲ受クヘシ）すなわち西洋での医薬制度を東京・京都・大阪の三府に試みに布達したが、その一ヶ年以上前の明治六年二月十五日に大阪府立病院が開院し、和蘭人教師エルメレンス Ermerins の指導になる「大阪府病院各局規則」が開院当日公布され、この医局規則と対等に作られた薬局規則により、薬局長の管理する薬局において、医師の処方箋を調剤する医薬分業が実施された、日本最初の医薬分業の始まりである。病院医薬分業は、その後県立病院でつぎつぎと実施され、順次日本の全病院薬局では、医薬分業が完全に行われるに至った。しかし日本中の一般診療所（医院）では、医師自ら調剤する医薬兼業が明治、大正、昭和へと続いた。

一般薬局において処方箋調剤を行う薬局はきわめて少数に限られ、大学病院門前町のある薬局、銀座・御堂筋等大都会の特殊な薬局に限られ、一般薬局は開設以来一枚の処方箋調剤の実績もなかった。

敗戦となり、GHQのサムス Sams 軍医は、日本医師・歯科医師・薬剤師の三師会長を集め、日本では医師は薬を売り、歯科医師は金を売り、薬剤師は診察をしている、といって欧米のごとく医薬分業を行うよう勧告した。国会は医師法、薬剤師法等の改正に着手し、厚生省は全国の薬局の整備を指導した。

日本薬剤師会（同調剤技術委員会）は、開設以来処方箋調剤の経験のない薬局に対し、一枚の処方箋で全国どこの薬局においてもまったく同一に調剤されるよう（処方箋上の医薬品はまったく同一でも、異なる剤型や適用とならぬよう）日本標準調剤教本（仮称）の編集に着手した。

当時の国鉄の混乱・乗車難から、関東（散剤軟膏剤等の固型剤）、関西（内外用液剤）に分かれて、地区の薬大教授、大学病院薬局長らが編集にあたり、総括は東京にて完成して、昭和三十年『調剤指針・初版』を講習会教材本として印刷し、日本薬剤師会主催にて、全国の開局薬剤師を都道府県毎に集め、薬大教授、大学病院薬局長らを講師として講習会を開催した。この教材に改訂を加え昭和三十一年『調剤指針・改訂版』を広く公刊した。

戦後始まった薬剤師国家試験の必須課目である調剤学の問題はこの『調剤指針』から出題されることが多く、全国の薬科大学の調剤学教育にもこの『調剤指針』が参考書として用いられた。さらに日本薬局方等の改正毎に、新しい調剤技術をも加え『昭和六十一年第八改訂　調剤指針』となった。

欧米には各国毎にきわめて巨冊の特長ある調剤薬剤学書があり、日本にも大冊の調剤学書があったが、現在日本では全国の開局薬局、病院薬局、薬科大学薬学部において、この二〇〇頁の小冊子が改版を重ねるとはいえ、日本調剤学を代表して三〇年となった。

（奈良佐保女学院短期大学）

自由民権運動にかかわった川崎の医師たち

深瀬泰旦

自由民権運動が国会の開設、地租の軽減、条約改正の三大要求をかかげて、近代的立憲政体の樹立と、生活の安定、民族自決権の確立を目指して立ち上がった日本最初の民主主義運動であることは、今日広く知られている。この運動は民選議院（国会）の設立を要求した明治七年から、実際に国会が開かれた明治二十三年頃まで続いた。

他の地域の民権運動が国会開設運動でスタートしたのに対して、神奈川県域の東部、いわゆる多摩三郡（多摩三郡が神奈川県を離れて東京府に編入されたのは明治二十六年のことである）と橘樹郡においては民権結社の運動が先行した。これら民権結社の結成とその運動にたずさわった川崎市域の在村的活動家の医師について報告する。

一　阿部容斉は天保四年（一八三三）一月一日生まれ。父